

巨大災害への備えを見直そう

日本災害情報学会副会長 藤吉洋一郎



私たちは今、巨大地震と大津波、それに、制御困難に陥った原発事故というかつてない複合災害の最中にあります。メディアは連日、被災地の状況や政府・自治体の対応を伝えているのですが、いまだに全体像を伝えきれないうえ、原発の展開を追うのに大わらわで、地震・津波の報道がとすれば覆い隠されがちになるという気がかりな現象が続いています。被災地の皆さんはさぞかし歯がゆい思いをしておられるのではないかと察します。

今回、「想定を超えていた」という声があちこちで聞かれました。たしかに従来から考えてきた防災対策では視野に入っていなかった巨大地震や巨大津波であったことは事実です。

例えば防潮堤は巨大津波で破壊されたり乗り越えられたりして、ほとんどが役に立ちませんでした。

避難にも問題がありました。津波に襲われた避難場所があちこちありました。大丈夫だと思ってきた鉄筋のビルでも4階まで津波に襲われたり、壊れたり流されたりしたものが見受けられました。

今回のような地震は東北地方の太平洋沖では1000年に1回程度繰り返されてきたのではないかとみられています。従来の防災対策でそれが見落とされてきたのは、歴史上知りえた範囲だけで考えてきたからではないでしょうか。自然の営みを相手にするとき、わたしたちはもっと長い時間スケールで考えなければなりません。地震や津波に限らず、台風や集中豪雨、あるいは火山噴火など他の災害でも同じです。

再び同じような災害の痛手を繰り返さないためには、巨大災害への備えを見直さなければなりません。そして、たとえどんなに時間がかかっても地域や町や村を、災害に対してより安全なところに作り変えていかなければなりません。頻度は小さいが極めて大きな巨大災害に「どう対処するか」、「どこまで備えたらいいか」検討することを提言します。

(大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授)